

ハワイ語特殊動詞群の位置付けに関する考察

— 『理解しやすい』記述体系を目指して—

岩崎加奈絵

kanaiwasaki@hotmail.co.jp

キーワード：ハワイ語、東部ポリネシア諸言語、文法記述、能格性、loa'a-type 動詞

要旨

ハワイ語¹は一般的に対格言語と見なされており、東部ポリネシア諸言語全体を見ても能格的な特徴を示すことは稀とされている。しかし、項の取り方に特徴がある特殊な動詞²群・“loa'a-type”が存在することも同時に記述されている。その項の取り方は能格的で、かつ、先行研究での扱いを見ると loa'a-stative verb のように状態動詞の一部として扱われている。

本稿では、こうした動詞をハワイ語の文法記述においてどのように扱うべきか考察し、(1) 部分的能格性の存在を明記する必要があるが、ハワイ語を accusative-nominative と定義しなおす必要はない、(2) 動詞の下位分類において状態動詞に含めず、行為動詞・状態動詞と並ぶ3つ目のクラスとすべきであると主張する。

なお本稿では、ハワイ語および言語学の研究コミュニティに属さない読み手にとっての理解しやすさを、言語事実の記述と両立させることを重視する。

1. はじめに

「能格(型)」については、以下の最もシンプルと思われる定義を採用する。

¹ ハワイ語は母音 /a, e, i, o, u/ とその長母音 /ā, ē, ī, ō, ū/、子音 /h, k, l, m, p, w, n, ʻ/ (ʻは声門閉鎖音を示す) で表記される。オーストロネシア語族東部ポリネシア語派に属し、孤立語、文は動詞文と名詞文に大別されるがいずれも「[述語]±[主語]±[目的語]±[その他の要素]」という基本語順である。現在第一言語とする話者は殆どない。各種教育機関での語学教育によりハワイ語を習得するのが主であるため、現代ハワイ語は「規範文法」に従う傾向が非常に強い。

² ハワイ語の品詞分類について、筆者は話者のレキシコンでは「内容語」「機能語」の二分法、表層のレベルでは「動詞」「名詞」「機能語」(とその下位分類)に分類して考えている。今回の議論では表層のレベルの話が中心となるので、基本的には「動詞」「名詞」等の語を注釈なく使用している。

表1 本稿における「能格性」

<p>◆<u>自動詞文主語と他動詞文の目的語が同じマーカ―を持ち、他動詞文の主語が別のマーカ―を取る。</u> (...the marker for surface “subject” of an intransitive sentence is not the same as the marker for surface “subject” of a transitive sentence; the “object” of a transitive sentence has the same marker as the subject of an intransitive sentence.)</p> <p>◆<u>明示的な受動態のマーカ―が無い</u> (There is no overt marker for passive voice.) (カッコ内は Hohepa [1969:297] より引用)</p>

大多数の語において、主たる分析者の母語である英語の場合と、「動詞の意味—主語・目的語などの役割—項の形態」の繋がり方が一致していたことが遠因かもしれないが、理由は何であれハワイ語の能格性という議論は稀である。

しかし同時に、項の取り方が大多数の動詞的内容語と異なる語彙(後述)があることについてハワイ語の言語学的研究の初期からしばしば言及されている。それが能格と関連付けられることはあまりなかったが、記述上注目すべき要素であるという認識は研究史上されてきていた。

一方、他のポリネシアの諸言語や祖語にまつわる歴史的・包括的研究においては、対格/能格は、主に歴史的変化の観点から長く論じられてきた。

前者の個別言語記述については、能格言語であるとされる言語(サモア語、トンガ語など)ではその内部記述において、どの程度、またはどのような点(統語・形態など)で能格性を示しているかに触れられていたが、ある意味「目立たない」対格言語とされるものについては、特徴的な文の例が少ないこともあり、能格性が可能性として取り上げられる機会自体あまりない。

ポリネシア祖語(PPN)の性質についての議論では能格性をPPNが有していたかどうかをしばしば話題にのぼる。大まかにまとめると、「能格的言語と、部分的に能格的な言語が優勢であり、PPNは能格性を有していたが、その後分化の過程で言語ごとに性質を異にしていっていった」といわれている³。加えて包括的な記述として、例えばKrupa(1982)では、東部ポリネシア(ハワイ語、タヒチ語、マオリ語など)については概ね対格言語の性質が強いとまとめている。

もともと対格/能格は全か無かという性質のもでもなく、程度は様々だが1つの言語内で混在状態にあることは奇異ではない。その上近い言語で能格性について論じられることが多いにもかかわらず、ハワイ語では先述のような特殊な項の取り方をする動詞を持ってはいても、能格性の有無や程度について可能性としても語られることが少なかった。

今回はハワイ語が能格言語か対格言語かという大きな議論より、文法システムの中に能格性を示すことがあるかどうかについて、現状十分に説明・議論されていないので、それを特殊動詞群の考察の出発点とした。

³ 菊澤(1998)はポリネシア祖語より上の階層として中央太平洋祖語を仮定した議論で、ポリネシア祖語・ロトウマ語・フィジー語の3つをその下位構成要素として立てたうえで、中央太平洋祖語は能格構造をもち、ポリネシア祖語はそれを保持したと結論付けている。

2. loa'a-stative verb—先行研究における記述

2. 1 Elbert and Pukui (1969) と Schütz, Kanada and Cook (2005)

本節では、冒頭で触れた「特殊な項の取り方をする動詞」について概観する。

動詞の下位分類について論じている数少ない研究のうち、Elbert and Pukui (1979:46-51) では自・他動詞や状態動詞の他に、“loa'a-stative verb”を立てている。同研究において、この類の明確な定義はされておらず、基本的に例を挙げいくつかの注釈を付け加えるにとどまっているが、重要な指摘としては (a) 状態動詞の一部で小さいクラスだが、頻繁に使われる語群であるということ、かつ (b) inherently passive という性質をもつこと、の2点が挙げられる⁴。

まず、loa'a-stative verb を判りやすくするため一般的な文の例⁵を示す。以下はそれぞれ、(1) 自動詞文、(2) 他動詞文の例である。

(1) E ho'i ana māua 'o Laua'e.

PART return PART IDL.INCL PART L.

「ラウアエと私は戻ります」

(2) E ho'ihō'i ana au i ke ka'a hou.

PART return PART 1SG PREP(OBJ) ART car new

「私は新しい車を返します」 (Hopkins [1992:142]) ※e V ana で進行相を示す

(1)では主語かつ行為者 (māua 'o Laua'e) が無標で示されている。(2)では主語かつ行為者 (au) が無標で、目的語かつ行為の対象 (ke ka'a hou) が、目的語のマーカである前置詞 (i) を伴って現れている。

次に loa'a-stative verb の例だが、出現頻度の高い代表的な動詞として、hiki⁶ (～できる)、loa'a (～を見つける、得る)、maopopo (理解する) が挙げられている。

以下にそれぞれ例文を示す⁷。

⁴ 同著者による辞書 (Pukui and Elbert [1986]) 冒頭の各語類定義では loa'a-stative に関する言及はなく各項目の品詞表示にも立てていない。ただし loa'a の項 (209:l) では「loa'a-stative verb のモデルであり、上で紹介した Elbert and Pukui (1979) の記述を参照」、とあるため、この段階でもカテゴリ自体を取り消してしまった訳ではないと考えられる。

⁵ 本稿におけるハワイ語例文のグロス及び訳は筆者による。また、斜字で主語、下線で目的語を示す。

⁶ ただし筆者は hiki をこの類に含めることに疑いを持っている。他の語が項として名詞句を取るのに対し、hiki の文では“ke+Verb”という不定詞構造を作るものが後続するし、主語として扱われるべき項が出現していないとみられるからである。それを前提に、ここでは先行研究の紹介の意味で例文を挙げた。

⁷ 各語の例文は Elbert and Pukui (1979) にも挙げられているが、この類の文が珍しくないことを明示する目的も兼ねて別資料から引用した。いずれも非常に典型的な例を示しているため論に齟齬が生じるなどの問題はないと考える。

- (3) 'a'ole loa e hiki iā lāua ke 'ike mai i ko
 NEG very PART can PREP 3DL ART see DIR PREP POSS
 ia nei 'ano a me ko ia nei kūlana
 DEM DEM nature and POSS DEM DEM rank

「彼らは彼女の性質や地位を理解することができなかった」(Ho'oulumāhiehie [2006:24])

- (4) "a'ole no paha e loa'a iā 'oe ku'u wahi koi?"
 NEG INT perhaps PART got PREP 2SG POSS:1SG ART axe

「もしかするとお前は私の斧を手に入れ(ることができ)ないのか」(Elbert [1959:31])

- (5) ma'anei e maopopo ai iā kākou ka nui o
 here PART understand PART PREP 1PL.INC ART high POSS
 Kauahoa, kona ki'eki'e a me kona laulā
 K. POSS:3SG high and POSS:3SG width

「いまや私たちはカウアホアの背の高さや(体の)幅を理解している」(Elbert [1959:97])

これ以外にもこの類の語として、ola'a (生かす/生きる)、lilo (失われた/～のものになる)、pau (終わった)、など、十数語提示している。ちなみに、興味深い記述として「近年の話者は loa'a-stative verb を他動詞として用いているようになっている (Ibid:51)」ともある⁸。

一方、Schütz, Kanada and Cook (2005) では、この Elbert and Pukui (1979) の見解を一部容れる形で loa'a-verb (S-II)⁹ という項目を設けている。そこでは“A verb that although is not formally PASSIVE, is semantically and functionally passive” (p.114) と定義されている。そしてこれらの語は状態動詞の一部であるが、一般的な状態動詞と違い、「状態の原因が意味的に含まれている」特性を持ち、「<語に>意味的に潜在する二つのもの (entity: 原因を与えるモノと状態を帯びたモノ) を伴う状態動詞」であるとする。

2. 2 Hohepa (1969) における主張

年代的に上記研究より古いものであるが、loa'a-type と能格性について論じた数少ない先行研究として Hohepa (1969) がある。この研究ではポリネシアの言語を広く取り扱い、現在の状況では、能格、能格一対格、対格言語の3つに分けることが出来ると見ている。ハワイ語は結論としてはやはり対格言語である、とされるが、議論の過程に興味深い記述があるため簡単に紹介する。

Hohepa も、他の研究と同様この語類を“inherently passive”であるとしているが、

⁸ 2.2 で紹介する Hohepa (1969) はむしろ反対に、ポリネシアの言語は全体的に対格から能格への drift を示していると主張している。

⁹ 関係する存在 (entity) が二 (II)つある類の状態動詞 (stative) であることを指す。

- (a) 接頭辞 *ho'o-* (causative) を付加すれば active に変えることができる。
- (b) *ho'o-*により active になったものには受身マーカ―を取ることができる。
- (c) 接頭辞なしでも受身マーカ―を取ることができるか否かの判断には揺れがある
(ただし、受身マーカ―を取るのは“badly spoken”と見なされる)。

と述べている¹⁰。なお、接頭辞に関する指摘について、Elbert and Pukui (1979) の記述は否定しないが、(c) に関するコメントとして「Elbert (p.c.) は受身マーカ―を取ることはできないという立場である」、とあるので、その後見解を変えたものと考えられる。

2. 3 その他の動詞的内容語との比較：自他の文、能動受動の文と *loa'a-type* 文

ここからは *loa'a-type* とその他大多数の動詞文をより詳しく比較する。

はじめに示しておかなければならない点として、ハワイ語は基本的に VSO 語順だが、(3) ~ (5) では VOS になっていた。これは *loa'a-type* だから、というわけではなく、代名詞が前に出たがるというハワイ語の一般傾向を反映した例¹¹である。次にあげる (8) に示した通り、主語が代名詞以外に変化すれば、後者のような語順にならなければならない。この変化は *loa'a* 文に限らないので、「動作主だから多くの場合主語になる場所に移動している」と考えることは難しい。

このことを踏まえつつ、以下で更に能動文・受動文・*loa'a-type* を並べる。

<一般動詞>

(6)(active) **Hele mākou i ka hale pule.**
 go IPL.EXCL PREP ART house prayer
 V S(A) O(P)

「私たちは教会に行く」(Hopkins [2006:41])

(passive) **Ua a'o 'ia 'o ia e ka makuahine.**
 ASP teach PASS PART 3SG PREP ART mother
 V S(P) (A)

「彼は母親に教えてもらった」(Hopkins [1992:154])

¹⁰ Hohepa (1969) の議論はポリネシアにおける能格>対格の遷移 (drift) がテーマであるが、ハワイ語は基本対格的で、ただ上述 (c) のような揺れもあり、能格構造へ向かっているとみている。これについては自然変異を続けた場合そうになっていたかどうか、という非現実の話になってしまうためここではこれ以上話を進めない。

¹¹ 例えば否定文で文頭に否定辞が来たときに主語の代名詞が動詞より前に来る、Have-a-lot 構文 (～を沢山持っている) の時、所有者が代名詞の場合、所有者が一般名詞の場合より前に来るなど。

<loa'a-type>

(7) **Maopopo ka 'ōlelo Hawai'i i kou 'ohana apau?**
 understand ART language hawaii PREP POSS:2SG family all
 V S(P) O (A)

「あなたの家族は皆ハワイ語を理解しますか」 (Hopkins [1992:173])

(8) **Ua loa'a ia'u he laka. // cf.) Ua loa'a ka leka ā Leilani**
 ASP got PREP:1SG ART letter ASP got ART etter PREP:1SG L.
 V (A) S(P) V S(P) O(A)

「私は手紙を受け取った」

「レイラニは手紙を受け取った」

並べてみると、loa'a-type が“inherently passive”としばしば言われるのは、語順の変化により (6) の受身文と同様、「動作—動作の対象—行為者」という並びになることと大きく関係していると考えられる。

以上より、自動詞文、他動詞文と loa'a-type 文を比較すると大まかに以下ようになる。

(9)	Verb	Subject (ø/'o)	Object (i/iā)
	一般自動詞 :	行為者(S)	ø
	一般他動詞 :	行為者(A)	行為の対象(P)
	loa'a-type :	行為の対象(P)	行為者(A)
cf.	受動文 :	行為の対象(P)	ø 行為者 [e (by)] (A)

図1 ハワイ語動詞文における、各動詞グループの項の取り方

こう見ると、一般的動詞が「S = A、P」であるのに対し、Loa'a-type は「S = P、A」であり、一般的に言う能格的なマーカの取り方をしていることになる。

2. 4 “inherently passive”とは

これまでみた先行研究では、みな inherently passive という言葉で loa'a-type の性質を表しているが、それがどのような意味合いで用いられているかについては触れられていない。

確かに形の上で受動態を示してはいないが、意味解釈では動作の対象が主語になるという点で“passive”と共通しているので、inherently passive というこの表現は便利な表現である。ただし、loa'a-type を (例数は限られているとはいえ) 統語的に受動に出来るという指摘もあり、どこが passive なのかをはっきりさせなければならない。その点、Schütz, Kanada and Cook (2005) は

“functionally”および“semantically”と挙げているが、前者の意図がわかりにくい。

loa'a-type は確かに主語選択が受動態の場合と共通しているし、理論の上でも能格性の議論が受動態と常に隣接してきた経緯もある。しかし、受動を示す接辞や独立形のマーカー、更に行為者を示す方法についても、ハワイ語の一般的な受動文とは全く異なるこの類について、意味を除いて passive と結び付ける必然性はない。よって、inherently passive は、正確には“semantically inherently passive”と解するのが妥当と考えられ、loa'a-type の定義を書く際にこのタームの使用については注意しなければならない。

3. 考察：「loa'a-type = 能格」か

冒頭で提示した定義に照らすと、2.3 で触れた通り項のマーカーについては能格的であり、またもうひとつ挙げた「受動マーカーが無い」という点についてははっきり当てはまると言ってもよい。この類の語に共通する形が語末にないことから接辞の化石化という可能性も低い。

よって、2 で挙げた loa'a-type の例は、確かに一般的な能格タイプとして捉える事が出来る。この場合、ハワイ語は多くの語において対格的であるが、語彙的な条件で一部能格的な振る舞いを見せることがある、部分的能格性を示す言語ということになる。通時的な事情を考えれば現在優勢な見方に沿い、祖語の能格性がハワイ語では部分的に残されている、と見做すことはそれなりに自然である。

その上で、本稿の趣旨に鑑み問題になるのは

(10) loa'a-type の存在から、「ハワイ語は部分的にしる能格性を有する」とすべきか

(11) 動詞のグループ分けにおいて、loa'a-type をどのような位置におくか

の2点に収束する。最後にこれらについて言及しておく。

3. 1 部分的能格性を主張する利点の有無

筆者としては、「ハワイ語は従来言われていたような対格言語ではなく、accusative-ergative である」、と主張することによる恩恵は無いと考えている。もちろん、対格言語であるという言説によって特殊動詞の存在が捨象されてしまうことになるのは望ましくないが、該当する語の数が少なすぎる。よって、記述の上で、例えば「祖語の有していた能格性を僅かながら残している」などのように触れておけばよいと考える。そうすることで、ハワイ語の言語事実を記述する目的は十分果たせるからである。

3. 2 動詞の下位分類への反映 - stative か

loa'a-type が動詞の範疇に含まれるのは、アスペクトマーカーとの共起から判断できるが、動詞の下位分類における位置については一考を要する。

Elbert and Pukui (1979) が loa'a-stative と呼んだモチベーションのひとつと予想されるのはポ

リネシアのいくつかの言語記述でしばしば動詞的内容語が *general* と *stative* に分類されることである。Hohepa (1969:305) では、前者は [+active] でマーカーを付けることで受動化可能な語類、後者は [+passive] で常に受動の語類としている。また、Schütz, Kanada and Cook (2005) もやはり *stative* の下位分類として扱っている。

ハワイ語だけを見ても、この類の動詞の意味は *gone, lost* 「失われた」、*to be gotten* 「得られた」、*known* 「知られる (理解される)」、*live* 「生き (ている)」のように、捉え方として行為より状態にフォーカスがあると考えられなくもないが、布英にしろ布日にしろ翻訳の困難な語群であるので、判断基準としては弱い。

以上を踏まえた上で、ハワイ語やポリネシアの言語に親しみを持たない読み手を想定して記述を組み立てる際に、この類は独立した動詞の1クラスとして考えるべきであるとする。翻訳の際 *loa'a-type* の語は訳の幅がかなり広く、意味的に「状態」であるとするのは難しい。また、*general-stative* という従来挙げられてきた対立軸も、「文法研究という分野の外でも認知されている一般的知識」というわけでないので、*stative* に含める積極的な理由は受動化しづらい点くらいであり、他の性質は状態動詞とは統語的に一線を画する。よって概略、

(12)動詞— 行為動詞 (歩く、寝る、座る、食べる...) — 自動詞・他動詞

— 状態動詞 (白い、美しい、眠っている...)

— *loa'a-type* 動詞

とすれば、背景を知らないことから *stative* という言葉に混乱させられる可能性を減じることができると考える。したがって、*loa'a-type* を記述する際に、これまで使用されてきた“*stative*”の文言を一切使用しないという立場を取る。

ちなみにこのような分類法は、「動詞」「状態動詞」それぞれの文の作り方と、更に頻出の *loa'a-type* 動詞については一語ずつ用法を習得していく、という現在の語学教科書のあり方と一致しており、言語事実の反映以外に、理解のためにはこの区分が有用であるとみられる。

4. 今後の展望

本稿のテーマについて、今後、まずは *loa'a-type* を構成する語が実際にどのくらいの数あったのか、Elbert and Pukui (1979) が挙げているが現代ハワイ語では特異な項の取り方をしない語が多数あるので、実際に *loa'a-type* として出現する例がどの程度見つかるか、いくつかの年代や著者のテキストに分散させて探したい。場合によっては取り上げられてはいないが実は一定の頻度で *loa'a-type* の使用をされているものが見つかるかもしれないので、それも念頭においておきたい。

それに加え、今回は能格性を中心に考察を進めたが、例えばそもそも事態・事象の切り取り方が異なるなどといった他の可能性も継続して取り上げ、それぞれ是非を確認していきたい。

この他にも「現代ハワイ語文法 (教育に採用され、現在使用されているハワイ語の文法)」

における loa'a-type がどのように今後扱われていくかに関心がある。日常言語で無くなった一方、例えば子供向けの本、一部の公の文書、さらに近年学位論文をハワイ語で書く例が出てくるなど、文化・社会的意識から使用される場面が増加傾向にある。ある種の人工統制がとられた状況下で、loa'a-type のような特殊な振る舞いの動詞が、Hohepa (1969) で指摘されたような、inherently active と inherently passive の merge のような変化を受け得るのかどうかは興味深い。もともとこれはかなり長いスパンで見に行かなければならないため、現時点では時期尚早と考えているため、長期的な展望として述べるに留める。

略号

S : (intransitive) subject、 P: patient、 A: agent

1, 2, 3 : 人称、 SG : 単数、 DL : 双数、 PL : 複数、 EXCL:除外形、 INCL : 包括形

ART : 冠詞、 ASP : アスペクトマーカ、 DEM : 指示詞、 DIR:方向詞、 NEG : 否定詞

INT : 強意詞、 PASS:受身マーカ、 PART:小辞、 PREP:前置詞、 POSS:所有形

参考文献

- Elbert, Samuel H. (ed.) (1959) *Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui (1979) *Hawaiian Grammar*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hohepa, Patrick (1969) The accusative-to-ergative drift in Polynesian languages. *Journal of the Polynesian Society* 78: 95-329.
- Ho'oulumāhiehie (2006) *Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopole*. Honolulu: Awaiaulu Press.
- Hopkins, Alberta Pualani (1992) *Ka lei ha'aheo: Beginning Hawaiian*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Krupa, Viktor (1982) *The Polynesian Languages; a Guide*. London; Boston: Routledge& Kegan Paul. (First published as *Polineziiskie Jazyki*, Oriental Literature Publishing House, Moscow 1975).
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1986) *Hawaiian Dictionary: Revised and Enlarged Edition*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho'omalu Kanada and Kenneth William Cook (2005) *Pocket Hawaiian Grammar: A reference grammar in dictionary form*. Waipahu: Island Heritage Publishing.
- 菊澤律子 (1998) 「中央太平洋諸語における能・対格構造とその歴史的变化」『第117回日本語学会予稿集』: 163-168.

Loa‘a-type Verbs in Hawaiian

IWASAKI, Kanae

kanaiwasaki@hotmail.co.jp

Keywords: Hawaiian, Eastern Polynesian languages, syntax, ergativity, loa‘a-type verbs

Abstract

Hawaiian has generally been described as an accusative language, and it has also been said that languages in Eastern Polynesia rarely show ergativity. At the same time, however, it has been noted that there is a group of verbs whose way of taking argument markers is unusual. Verbs of this kind, the so-called “loa‘a-type” verb, look like verbs in ergative languages. They have so far been treated as a subset of stative verbs.

This paper aims to consider how such verbs should be treated in the grammatical description of Hawaiian. My points are: (1) although it must be recognized that several verbs in Hawaiian actually show partial ergativity, there is no need to re-define Hawaiian as an accusative-nominative language; (2) stative verbs and loa‘a-type verbs should be separated, though formerly loa‘a-type verbs have been called loa‘a-*stative* verb.

(いわさき・かなえ 東京大学大学院博士課程)